

2019年11月号

VOL.36

# セルフ関東ニュース

発行：関東社会就労センター協議会〔関東セルフ協〕

## 令和元年度 関東社会就労センター協議会 研究大会

inぐんま

### 「ご挨拶」

関東社会就労センター協議会  
会長 小池 邦子



こんにちは！ 関東社会就労センター協議会の会長を仰せつかっております長野県の小池と申します。よろしくお願いします。

大会に先立ちまして、一言ご挨拶をさせていただきます。

5月1日 新天皇が即位され「令和」という新しい時代の扉が開かれました。どんな時代になっていくのか？ いやどんな時代を築いていくのかは会員の皆様一人ひとりの胸の内なのではないでしょうか。

平成最後の年に改正障害者総合支援法が施行され、第5期障害福祉計画に基づいて報酬改定もなされました。その中で、就労系サービスにおいては初めて成果主義が採用されました。加算が廃止されたり、減額されたりした。現実のなかでも障がい者が安定して地域で

暮らせるを支援する事業所として毎日元気に通ってくる障がい者のために事業を新規開拓したり売り上げ・工賃を上げていくための工夫と努力を重ねてきました。ところが、国の機関を始め各地方の機関でも障がい者雇用の水増し問題が発覚しどうしてこんなことが？ と多くの疑問を感じずにはいられません。障がい特性を活かして仕事をするでなく、仕事に障がい者をはめようとした弊害ではないかとさえ思ってしまった。

そんな中、もつと違った目線で障がい者支援をしていきたい。職員も・障がい者も仕事も・生活も楽しんでできないものかという強い思いが、今回の関東社会就労センター協議会研究大会 inぐんまのテーマ「普通に楽しむ」に盛り込まれたのではないのでしょうか。

新しい時代にふさわしく、今まで社会就労センターが大事にしてきた障がい者一人ひとりの人権を尊重して障がい者の自立と自己実現を目指す就労・生活支援を基本にしながらも目線を少し変えてというわけで、やる気が起きる余暇活動の進め・工賃アップに喜びを感じながら働く障がい者の姿・職員が障がい者支援を楽しみながらやる姿

等をイメージしながら3つの分科会で語り合う場が設定されました。どんな話題が飛び出すのか楽しみですね。

2日目の記念講演でも「障がい者にとつての普通に楽しむとは」を実践例を交えて繁成教授からお聞きし、シンポジウムで当事者から実際に楽しむ姿をうかがうことができそうです。勿論基本となる障害者施策の部分では、全国セルフ協の阿由葉会長に基調報告を。厚労省障害福祉課石井課長補佐にも動向をお聞きします。

盛り沢山の企画ですが、2日間自分流の「楽しむ」を実践しながら参加してみよう。

新しい気づきが・発見があるかもしれません。

最後になりましたが、今研究大会では中塚会長・萬谷実行委員長をはじめとする群馬県社会就労センター協議会の皆様には大変なご尽力を賜りましたことを心より感謝いたします。

この2日間は、実り多い研修の場であると同時に多くの方々と交流して仲間づくりをすることも忘れないでください。

(令和元年6月27日)



# 大会概要

群馬県開催の研究大会が、6月27日(木)から28日(金)にかけて、北関東の玄関口である「JR高崎駅」に直結したホテルメトロポリタン高崎において開催されました。関東ブロック1都10県から約170名の参加を頂き、実りある大会となりました。「普通に楽しむ」をテーマとして、1日目は、基調報告、分科会、行政説明が行なわれました。夕方からの交流会にも約100名の方が集い、良き情報交換の場となりました。2日目は、記念講演とシンポジウムが行なわれました。記念講演では、東洋大学の繁成剛教授より国際的な余暇支援・障害者スポーツ大会の歴史から現在の取り組みについての講義を頂きました。シン



ポジウムでは、障害のある方3名が登壇し、ご自分の仕事・楽しみ・恋愛等についての多くの思いを語ってくだ

さいました。障害があるがゆえの戸惑いや工夫、また、障害があってもなくても「楽しむ」気持ちは一緒であること等、一つひとつの言葉が参加者の心に響きました。

当初は「楽しむ」という一見就労支援とは離れたテーマに違和感を覚えたという声も聞かれたようですが、1日目の分科会では、「働く」ことは生活するためだけでなく、余暇を「楽しむ」という目的があることで、意欲向上ややりがい、生きがいに繋がるものであるという、本来の就労支援の意義に立ち返ることができました。また、2日目の基調講演では、日常生活の中にも「楽しむ」があると改めて気付かされ、シンポジウムのまとめでは、非日常の余暇支援のみならず、日常にも目を向け、利用者の方を良く知り、一方的に支援を行うだけではなく、ご本人と共同していくものであるというお話を頂きました。「楽しむ」ということの意味や意義、そこから生まれる力について、多面的に深めることができました。

今大会で得られた多くのヒントや目標をもとに、障害のある方の、余暇を含めた日々の暮らし・人生が充実するような支援がなされ、今後さらに多くの笑顔が増えることを望みます。

## 関東就労センター協議会研究大会 in ぐんま プログラム

6月27日(木)

時 間	内 容	会 場
12:00~ 13:00	受 付	6階 ロビー
13:00~ 13:30	開 会 式 開会の言葉 群馬県社会就労センター協議会 大会実行委員長 萬谷 高文 氏 主催者挨拶 関東社会就労センター協議会 会長 小池 邦子 氏 群馬県社会就労センター協議会 会長 中塚 美子 氏 来賓挨拶 群馬県健康福祉部 障害政策課長 井上 秀洋 氏 高崎市福祉部 障害福祉課長 千明 浩 氏 群馬県社会福祉協議会 会長 川原 武男 氏 全国社会就労センター協議会 会長 阿由葉 寛 氏 主催者紹介 登壇者全員	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
13:30~ 14:10	基 調 報 告 「報酬改定を受け、今後の社会就労センターが目指す方向性について」 全国社会就労センター協議会 会長 阿由葉 寛 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
14:10~ 14:20	休 憩	

時 間	内 容	会 場
14:20～ 16:20	<p>第1分科会「普通に楽しむ」</p> <p>【助言者】 関東社会就労センター協議会 会長 小池 邦子 氏</p> <p>【進行役】 群馬県社会就労センター協議会 副会長 中村 建児 氏</p> <p>【発表者】</p> <p>神奈川県（福）よるべ会 梅香園 課長 齋藤 仁 氏</p> <p>静岡県（福）富岳会 富岳の園 サービス管理責任者 野田 幸弘 氏</p> <p>群馬県（福）すてっぷ 社会就労センターびいす サービス管理責任者 佐藤 美絵 氏</p> <p>【レポート】</p> <p>千葉県（福）まごころ 多機能型事業所ビーアンビシャス 副施設長 花田 鉄平 氏</p> <p>新潟県（福）さくら園 居多さくら工房 主任 宮崎 知佳 氏</p> <p>山梨県（福）ムーブ 障害者サービスpal-pal 施設長 相川 敏男 氏</p> <p>第2分科会「工賃向上と働く喜び」</p> <p>【助言者】 関東社会就労センター協議会 副会長 寺口 能弘 氏</p> <p>【進行役】 群馬県社会就労センター協議会 理事 中原 泉 氏</p> <p>【発表者】</p> <p>埼玉県（福）はぐくむ会 はぐくみ園 生活支援員 武井 郷 氏</p> <p>東京都（福）豊芯会 常務理事 近藤 友克 氏</p> <p>群馬県（福）日輪 ラスター サービス管理責任者 戸塚 和幸 氏</p> <p>【レポート】</p> <p>栃木県 とちぎセルフセンター 吉澤 利明 氏</p> <p>長野県（福）花工房福祉会 炭房ゆるくら サービス管理責任者 今井 広樹 氏</p> <p>群馬県（福）広済会 新里町障害者サービス事業所クローバー 施設長 藤本 寿美 氏</p> <p>第3分科会「職員が『普通に楽しむ』とは」</p> <p>【助言者】 関東社会就労センター協議会 副会長 鈴木 暢 氏</p> <p>【進行役】 群馬県社会就労センター協議会 理事 鳥羽 正晃 氏</p> <p>【発表者】</p> <p>茨城県（福）筑紫会 真壁授産学園 施設長 吉原 大樹 氏</p> <p>群馬県（社福）光の里 フィロスあけぼの 就労支援員 加藤 学 氏</p> <p>★ グループワーク</p>	<p>6階 うぐいす</p> <p>6階 おしどり</p> <p>6階 白鷺</p>
16:20～ 16:30	休 憩	
16:30～ 17:30	<p>行政説明</p> <p>「障害者就労施策の動向について」</p> <p>厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 課長補佐 石井 悠久 氏</p>	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
17:30～ 18:30	移動・休憩・宿泊者チェックイン	

時 間	内 容	会 場
18:30～ 20:30	交 流 会 開会の言葉 関東社会就労センター協議会 研究大会2019 in ぐんま 実行委員長 萬谷 高文 氏 挨 拶 関東社会就労センター協議会 副会長 内藤 晃 氏 乾 杯 関東社会就労センター協議会 総務委員会委員長 阿部 裕一 氏 中 締 め 関東社会就労センター協議会 事業振興委員会委員長 黒川 亨 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ

## 6月28日(金)

時 間	内 容	会 場
8:30～ 9:00	受 付	6階 ロビー
9:00～ 10:15	記 念 講 演 「普通に楽しむ」 東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科 教授 繁成 剛 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
10:15～ 10:30	休 憩	
10:30～ 11:55	シンポジウム 「普通に楽しむ」 【コーディネーター】 関東社会就労センター協議会 副会長 内藤 晃 氏 【発表者】 [新潟県] 赤倉観光ホテル 板橋 勇樹 氏 [群馬県] (福)恵の園ホテル 高橋 剛 氏 [群馬県] ワークプラザ虹 [ピアサポーター] 池田 頼彦 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
11:55～ 12:20	分科会報告 【発表者】 第一分科会進行役 群馬県社会就労センター協議会 副会長 中村 建児 氏 第二分科会進行役 群馬県社会就労センター協議会 理事 中原 泉 氏 第三分科会進行役 群馬県社会就労センター協議会 理事 鳥羽 正晃 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ
12:20～ 12:45	閉 会 式 次回開催挨拶 茨城県社会就労センター協議会 会長 川俣 宗則 氏 閉会の言葉 群馬県社会就労センター協議会 会長 中塚 美子 氏	6階 丹頂Ⅰ・Ⅱ

1日目

基調報告

「令和元年度 全国社会就労センター協議会の取り組み」

講師 全国社会就労センター協議会 会長 阿由葉 寛氏

令和元年度事業・基本方針を踏まえ、工賃向上・受注拡大の取り組み実現に向けて本格稼働していく。また、令和3年度の報酬改定に向けた取り組みについてもきちんとしていく。特にB型事業所の基本報酬の在り方についてセルブ協全体で検証し、厚労省に示していくことが大切だと考えている。また、セルブ協だけでなく福祉協会等、皆が一緒に



力を合わせて進めていくことが大切だと考えている。

○ 令和元年度セルブ協事業概要

基本方針は「利用者の安定した地域生活を実現するために環境整備を進める」であり、そのための柱として次の5つを掲げている。

- ① 働く障害のある方への社会の一層の理解促進と発注拡大に繋がる機会の拡充
- ② 『働く・くらす』を取り巻く制度・政策・予算の改善に向けた対応
- ③ 働く障害者への支援の質を高めるための大会・研修会等の開催と啓発
- ④ セルブの機能強化の基盤となる調査研究活動の推進
- ⑤ セルブ協事業の充実を図るための組織体制の強化

①については、優先調達推進法を含め、使えば工賃向上に繋がる大きな制度をいかに使えるようにしていくか、まだまだ考えなくてはならない。③については、障害の重い方も含めて就労をしていく中で、どのような制度が良いのかを検討していく。また、2つの委員会から合同委員会を作り、工賃に反映されない支援についての検討も進めている。更に9月末からフランスでの視察研修を予定している。

○ 工賃向上・受注拡大実現特別委員会 この特別委員会の事業の方向性は次の3つである。

① 人材育成

工賃向上に特化した研修を実施し、考え方、目的、意義等を改めて学んでいく場を作る。

② 現場の支援

短期で工賃向上に取り組む事業所を応援する。年間4〜7施設、1施設2年間の支援予定。特別委員会メンバーと専門家チームも介入し、実際に事業所に行き、どういう取り組みをするのか検討する。現状行っている仕事を切り替えるかどうかという判断の問題がある。

③ 共同受注窓口の活性化

今年9月に研修会を実施。日本財団と組み、実際に仕事を出している事業所の具体的な取り組みをここで身につける。実際に収益を上げていく仕事を知る。

○ 厚労省との意見交換会について

優先調達推進法については国も一生懸命進める方向で、先日も新しい通知が出ていた。きちんと進めていくことは厚労省も我々も思いは一致している。全てに意見・要望するのではなく、感謝すべきところは伝えていきたいと考えている。B型の基本報酬設定について、現行の制度を前の仕組みに戻すことは難しいという話であった。しかし、こちらはそれに納得するのではなく、更にこちらの思いを伝える必要がある。引き続きこの点は負けずに意見交換をしていこうと思っている。

分科会

▼ 第1分科会 (参加48名) テーマ「普通に楽しむ」

発表①

「普通に楽しむ」 神奈川県 (福)よるべ会 梅香園 齋藤 仁氏

職員の仕事は「最高の笑顔作り」であり、どんな笑顔を作ることができるか試行錯誤している。電車に乗って出かけるのが楽しい、おいしいものを食べられたという笑顔もあるが、それは当施設でやることではなく、それぞれの生活の中でやること。繰り返してやることの中で、できることが少しずつ増える。家族も本人も喜ぶことができる笑顔作りを目指している。

○ 張子人形の作成

重度の利用者の方でもできることを考え、前施設長の得意だった張子人形作りを始めた。干支や起上り小法師、ファスナーチャーム等である。なかなか皆が同じように平等に楽しむことは難しく、一人ひとりやれることが違う。その人ができることを作るために作業を細かく分解している。顔を描くことは難しいが、印刷したものを貼ることができる人が



いる。印刷だけする人もいる。一人ひとりができることを作っている。

○ 趣味の教室

実際には、仕事を楽しめる人ばかりではないため、何をすれば暮らしに生きがいを持てるかを考え、平日の時間の中に講師を呼んで「お教室」の形をとっている。内容は、歌唱、ヨガ、ウクレレ、エアロビ、リズム体操、習字、裁縫、キーボード、音楽、手話、漫画、パソコン、絵画の13種類。職員が講師をやるのは厳しく、行き詰ってしまうため、それぞれの講師として外部の方を招いている。本来は一人ひとりに合った教室が作れたらと考えている。

○ 行事

地区の行事やイベントに積極的に

参加しながら、その準備を日中活動に必ず組み込んでいる。「県西地区みんなのつどい」については、行事に使うミニオンのハリボテを皆で作る。運動会については、1ヶ月程前から毎日昼休みに応援合戦の練習をする。「秋の感謝祭」については、ひよつとこ踊りの練習をする。「県西地区文化事業」は、習字で書いたもの、創作活動でつくったもの、音楽教室で練習したことを発表する場となっている。

「人一能之、己百之」

(ひと、

ひとたびしてこれをよくすれば、

おのれこれひやくたびす)

人が1回でできることを、自分も百回やってみれば、できるようになる。

発表②

「富岳の園における就労支援事業と

余暇活動の取組み」

静岡県 (福)富岳会

富岳の園 野田 幸弘氏

○ 余暇時間

① 年中行事

誕生会、季節の行事、文化祭、バーベキュー、成人を祝う会等。

② 園外外出・レクリエーション

買い物外出、食事会、日帰り旅行、一泊旅行、イベント見学等。

③ 法人内施設間交流

法人内施設の行事参加、ボラン

ティア公演、保育園児との交流(運動会等への参加)、高齢者との交流。市内14施設が協力・交流しながら活動。

④ 法人内施設合同行事

納涼花火大会(利用者、家族、地域の方1200名が来訪)、富岳まつり(14施設合同、作品の芸術祭、催し物)、絵画展。

⑤ 地域交流

富岳の園は、就労施設のため販売で地域に出かける機会が多い。様々な地域のイベントやお祭りに、出店や太鼓の公演で参加している。

⑥ 富岳会独自の取り組み

法人理念

健：スポーツ活動を通じた健康

維持、体力の向上、規則正しい食生活。運動会、スポーツ大会に参加。スペシャルオリンピック世界大会金メダル受賞実績も。

心：音楽活動、和太鼓活動を通じた心のトレーニング、あ

いさつ、礼儀作法の習得。始まりと終わりを身につける。自主公演。

愛：絵画、造形活動を通じ、感

性、感受性、想像力を高める。

○ 療育が趣味へ、そしてそれが就労へ

療育活動に取り組んだ経験から、何人もの方が専任講師による絵画

活動を希望するようになった。その方達が趣味として外部講師による絵画教室に参加し、御殿場市民芸術祭等の一般向けの展覧会やプロの画家が出演する上野美術館開催の白日展にも出展できるようになった。様々な活動とその実績から、2名がプロとして活動している。静岡県庁や沼津信用金庫様への絵画の貸出、絵画の販売、オリジナルグッズの製作、保育指導書表紙絵のデザイン提供、カレンダーの販売等を行なっている。

和太鼓は、施設を利用する全ての方を対象にセラピーとして実施している。太鼓が好きな方やレベルアップを希望する方は、法人主催の一般向け太鼓教室へ参加し、見学者への公演や外部依頼先へのボランティア公演を行なっている。その結果、プロのチームとして富岳太鼓竜神組を結成した。現在は、富士ぎくからホテル様と年間契約をし、昨年度は527回公演があり、年間1162万円の収入であった。その他、外部公演、見学者へのワンコイン公演、海外公演等を行なっている。

○ 障害は個性

皆一人ひとり違った好みや性格を持つている。多くの体験の中から一人ひとりの輝く個性を発掘し、個性を楽しみながら磨くことで、世界にたった一つの個性という宝石が生ま

れる。

○遊働一致

得意なこと、やりたいことを仕事にできることは人間の理想である。真の働きとは、己に与えられた天職を探り当て、ただただ無心に働くこと。その時、苦勞を感じることはない働きは、そのまま無上の喜びとなり、他人には遊んでいるように見える。これが働きの極みである。真剣に遊べ。

発表③

「ふつうに働く、ふつうに暮らす、ふつうに楽しむ！」

群馬県(福)すてっぷ

社会就労センターびいす

佐藤 美絵 氏

すてっぷの理念(クレド)は「職員は、障害のある方々が、夢をもつて働くこと、暮らすこと、楽しむことができるよう創意工夫し、全力で支援します。」であり、余暇支援も重要な活動としている。

○LAVUK(ラヴック)

法人として福祉先進国の北欧への視察を過去4回行っており、LAVUKにも2回訪れた。LAVUKは、デンマークの障害者余暇活動支援センターで、昼間から夜間にかけて活動を行なっている。絵画、ピザ作り、フットサル、ホッケー、乗馬、パーティー等の様々な余暇支援を行なう

と共に、男女の出会いの場にもなっている。自治体から一人につき年間約150万円が支給されている。

○自立講座

月に1回程度、土日祝日を利用して自立のための「自立講座」を行っている。個々の楽しみが休日や夜間の余暇に繋がるよう、楽しむことをたくさん体験することを目指し、様々な活動(バイスキー、スノーラフティング、テニス教室、アフリカダンス、東京で電車に乗る、メイドカフェ、買い物、居酒屋で飲み会等)を行っている。

○国内旅行

毎年1〜3泊の国内旅行を企画している。ただ用意された旅行に行くのではなく、参加者・家族と旅行準備会(勉強会)を繰り返し行っている。それぞれに合った移動手段も考えている。北海道旅行では、カヌーに乗るために座位保持不可の方専用のクッションを作り、事前に何度も練習した。沖縄旅行では、車椅子で行けるビーチを選択し、車椅子のまま入れる浮き輪を使用した。シュノーケリングの練習も事前に行った。

○海外旅行

2〜3年に1度、海外旅行も法人合同で企画し、多いときは40人ほどの参加がある。施設が2万円負担し、残りは実費となる。毎月の工賃を積み立てる方もいる。事前の旅行準備

会を国内以上に実施している。

○余暇支援をすることの意味

「障害があるからできない」と諦めず、必要なことは手伝いを頼み、楽しんで良いのである。また、「いくつになっても家族と一緒に出かけること」は、一般的に考えるとノーマルと言はず、年齢と共に成長し、家族以外と出かけることや遊ぶことは、誰でも当たり前に経験することである。年齢相応の楽しみを経験すること、色々な人とたくさん遊ぶを経験することで、人生が豊かになる。それが余暇支援をすることの意味である。

「平日は仕事、休日は遊び、というメリハリのある生活」や「普通に働き、普通に楽しむ、当たり前前の生活」を支えていくために、これからも余暇支援を工夫していきたい。

総括(助言者)

関東社会就労センター協議会

会長 小池 邦子 氏

今までの研究大会は、工賃アップや優先調達推進法等の分科会が多かった。正直、会議の中で「普通に楽しむ」という群馬県のテーマを初めて聞いた時には、違うのではないかと感じたし、他県に働きかけても「普通に楽しむ」というテーマでは、という返答もあった。しかし、今日の発表を聞き、こういうことなのだ

と実感した方も多いと思う。梅香園の「みんな違ってみんな良い」という発表や、規模が大きい富岳会の発表からも、何か取り入れることができればと思うし、すてっぷの発表からは、法人が大きいということだけではない職員の取り組みを聞くことができた。

障害がある方もやはり「何のために働くのか」「働いて得た工賃をどう使うのか」というところまで考えていないことが多いが、そういうところまで教えていくと、職員から「工賃アップ」と働きかけなくても、利用者自身が「もっと働く場を」と主張できるようになってくるかもしれない。働きたいという気持ちを支える職員として、何か手立てを持ち、それが楽しみに繋がっていくと良い。

以前教員をしていた際、転ばぬ先の杖ばかり持ってしまったという親御さんに対し「経験したことがないからできないのである、経験させよう、街へ出よう」と働きかけてきたが、3人の発表を聞いて、間違っていたかかったと感じた。富岳会の、趣味が



プロになり、稼げるようになるのは理想だと思う。そこまでいかないとしても、どの発表の資料も利用者の方がとても良い笑顔をしている。やりたくないことをやらされているのであればこのような表情にはならない。この笑顔を失わないために、職員自身も楽しみながら障害者支援をしていけたらと思う。

▼第2分科会（参加46名）

テーマ「工賃向上と働く喜び」

発表①

「地域作業における3つの変化」

埼玉県（福）はぐくむ会

はぐくみ園 武井 郷氏

利用者さんの「働きたい」を実現できるよう、日々活動や支援を行なっている。埼玉県セルブセンターからの紹介により、園地管理業務（熊谷スポーツ文化公園）と除草清掃作業（スペースECO駐車場8箇所）の地域作業を生活介護利用者のグループである農耕班で請け負った。1年間地域作業を行なった中で「変化」について報告する。

○利用者さんの変化

地域の方に「綺麗になりますね」「いつもありがとうございます」と声を掛けられると、楽しみや自信になる。たくさんの人と接し、明るい表情や元気な挨拶が増えた。他の施設

設の皆様との交流も増え、社会経験が豊かになった。たくさんの人との関わりが、表情や行動に良い変化をもたらし、地域の中で働くことの楽しさや喜びをより実感できている。

作業の種類が増えたことにより、個々に適した作業、得意な作業、やりたい作業を実現できた。自分の役割を担うと、良い評価を得て認められ、各役割への満足は、働く意欲や居場所の充実に繋がった。また、地域作業で得た経験や技術が、施設での畑作業や日中活動の活性化にも繋がっている。

○職員の变化

以前は、農耕班として全員を対象に声掛けをしていたが、その抽象的な伝え方により利用者さんの混乱を招いてしまうことがあった。地域作業を始めたことをきっかけに、農耕班全員を対象ではなく、利用者さん一人ひとりを対象に具体的な声掛けを行うようになった。伝える方法として、言葉でのコミュニケーションの他、文字、写真、絵等を使った視覚的なコミュニケーションの方法を取った。作業でも刈る範囲が分かりやすくなるように矢印を付けた。また、達成しやすい目標を作りながら作業を行なうことで、作業効率の向上に繋がった。アプローチの方法を工夫することで、職員が利用者さんの働く喜びを感じ取ることができ、支援の楽しみができた。



○環境の変化

農耕班の収入は、平成28年度と平成30年度を比べると約7倍に増えた。時給が上がることで、欠勤が減り、利用率がアップし、工賃向上に繋がった。

どんな人でも働く喜びを知ることによって仕事への意欲は高まる。利用者さんも地域の中で働くことよって、仕事への意欲に良い変化を起こし、働く喜びになったと考えられる。利用者さんの良い変化や利用者さんの楽しみは、職員の楽しみにもなった。各利用者さんにどう伝えていくか工夫したことよって、利用者さん一人ひとりを深く知る機会となり、障害の理解にも繋がった。

発表②

「工賃向上と働く喜び」

東京都（福）豊心会

ジョブトレーニング事業所

近藤 友克氏

B型では、ダイレクトメール、公園清掃、ポスティング、アパート清掃を行なっている。ダイレクトメールは単価が安く（1通1円）、売上を上げるためには、大量の部材を置いたり運んだりする必要があり、女性利用者がいなかった。そんな中、東京セルブから「まつ毛エクステ」を取り扱う通販会社の紹介を受けた。やりがいがあり、女性らしさを活かせる仕事を上手く導入できた。

A型では、高齢者配食サービスや豊島区公舎4階でカフェを行なつて



いる。高齢者配食サービスについて、行政からの補助金が1食4000円から段階的に減額され、今年度からは0円となった。そのため、企業やデイスサービス等へのお弁当販売を強化した。

東京セルブから飯田橋の㈱PCAを紹介され、平成30年6月から実験的に会社内でのお弁当販売を開始した。その他、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の会議用のお弁当やケータリングの食事も行っている。

東京ボランティア市民活動センターの取り組みの一つとして、東京都福祉保健局と「企業CSR連携促進事業（東京D&Iプロジェクト）」を実施している。専門のコーディネーターが、障害福祉サービス事業所等と企業のCSR活動とのマッチングを行い、両者の様々な連携を支援している。年間2〜3回研修会も開催され、事例報告が行われると共に、マッチングの機会にもなっている。事例としてジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社、三菱UFJ銀行、中外製薬株式会社、東京家政大学、大正大学等から受注しており、とても大切な柱となっている。

障害雇用・就労研究会が実施した調査である「障害者のデイリーストック・ワーク実現に向けて求められる施策の在り方に関する調査研

究」について、ヒアリング協力を行ない、やりがいを感じる主な理由を聞き取った。

- ・社会に役立つ一端を感じている
- ・ものが作りの一端を担っている
- ・仕事が評価されている
- ・担当職員に認められる
- ・好きなことがやれている
- ・家でゴロゴロしていることを思えば、天国のようなものである
- ・仕事していると精神的に助かる
- これらの理由から、障害の有無に関わらず、働くことで役に立つことや認められることが、自己確認のためにいかに重要であるか理解できる。

### 発表③

#### 「工賃向上と働く喜び」

群馬県（福）日輪

ラストー 戸塚 和幸氏

平成30年度平均工賃実績は、前年度に比べ3円アップし、356円となった。これは、3年前から茨城白菜栽培協同組合と提携している白菜の収穫量が、初年度6千株から1万3千株まで増加したことや、官公需での除草、パソコン解体等多岐にわたる作業を行い、利用者の方々と共に歩んできた結果である。乗用草刈機の運転については、職員より上手な方もいる。

今回の「工賃向上と働く喜び」は、

大変難しいテーマである。皆で相談した結果、当施設の現状としては、相反する問題点だと考えられる。工賃向上を目指すためには、良い仕事を選択しなければならぬが、それは利用者にとって厳しく辛いことにもなり兼ねない。除草作業は夏場35℃を越え、連続4時間以上作業を行なう。辛いと感じる作業に対して、喜びややりがいのある仕事と感じられるように支援していく必要性が出てくる。

#### ○老人ホームシート交換作業

利用者2人がペアとなりシート・布団カバー・枕カバーの交換を行なう。息が合わないと、よじれてしまつて上手くいかない。シートは両端を三角折りにするが、技術的な差が生じる。三角折りの技術向上やペア同士の息の合わせ方について支援している。作業後にミーティングを行い、問題点や反省点を皆で語り合うことが、作業意識を高めることに繋がっている。

#### ○マンション・アパート清掃

不動産会社から委託されており、高い技術を求められる。共有フロアのモップがけ、各階の通路・非常階段・エレベーター内・駐車場の清掃、共有部分の窓拭き等を行なう。クレーンがあつた場合は、その内容を担当する利用者に伝えると共に、清掃作業に参加する皆で今後の作業の

進め方や方法を考える。利用者の意見を積極的に取り入れることで、その効果と結果に達成感とやりがいを感じることが出来る。

○ 広告新聞の配布（ポスティング）  
他の作業とは違い完全歩合制である。配付エリアには、それぞれ担当がある。エリアを受け持つことで責任を持って取り組み、自ら配付しやすいルートを考えたり、広告を入れやすい靴を探してきたり、配付部数を増やしたり工夫している。これらは作業意欲を高めることに繋がっている。

様々な作業に取り組んでもらう中、利用者自身のアイデアや発想を組み入れて、作業に向かう意識や向上心を持ってもらうことが、達成感や喜びに繋がっていく。

社会福祉法人日輪の基本理念である「安心・安全と自由な精神の下に支援していく」に則り、職員一同、一丸となって取り組んでいる。

#### 総括（助言者）

##### 関東社会就労センター協議会

副会長 寺口 能弘氏

事業所内や新潟県内で「工賃向上」や「働くこと」について議論をすることがあるが、こういう話はメンバーさんだけの話にしてしまいがちである。職員の方に聞くと「人の役に立ちたい」「メンバーさんの役



「必要とされる人間になりたい」「自分がとうとと言われる嬉しい」「自分が成長したい」等、優等生の発言もあるが、お金が欲しいという本音もあるのではないか。高給を得るために職種を変えろという選択肢がある中、また、福祉業界に人が集まらない中で、仕事とその報酬のバランスは大切である。

亡くなられた日本理化学工業の大山会長が、人間の究極の幸せは「愛されること」「褒められること」「必要とされること」「役に立つこと」と講演等で仰っていたが、就労B、就労A関係なく、一般就労も関係なく、こういうことを私達が常に意識していかねばならない。

職員に褒められるのではなく、仕事に行った先で、全く初めて会った方や色々な方から、心のこもった「ありがとう」を言ってもらえるケースが圧倒的に多い。知った顔に褒められることも良いが、知らない人に「す

ごいね」「いつも助かっているよ」と言われることが本人の成長に繋がるという話を聞く。そういう仕事を作っていくという視点が必要である。

法人の経営という視点で見れば人が集まらないのはマイナスだが、同時に企業も人が足りない状況なのである。人が足りないイコール、仕事はあるがやる人がいないということ。だから、どこかでやる施設を探す。そういう時こそ福祉の一番であり、新しい事業を取り込む一つのチャンスであると、私達は思わなければいけない。

▼第3分科会（参加56名）

テーマ

「職員が『普通に楽しむ』とは  
〜福祉の魅力・利用者支援の  
魅力を共感しよう〜」

発表①

「職員が『普通に楽しむ』とは」

群馬県（福）光の里

フィロスあけぼの 加藤 学氏

私は仕事大好き人間であり、普通を飛び越えて、最高に楽しんでいる。

また、勤めて11年間、病気と結婚で退職された2人を除けば、辞めた職員は誰もいない。その理由は、上司・先輩職員による「日常の承認」である。私の職場では、普通では考えられないほど理事長、総合施設長、管

理者の方々が、現場職員を日常から認め、大切にしてくれる。そして先輩職員は若手職員を大事にする。これこそが私達職員のモチベーションの基礎となり、誰も辞めない職場の柱となっている。確かに利用者さんの笑顔が見られた時、何か成果を出すことができた時は、嬉しくてたまらないし、本当に最高の瞬間だと思う。しかし、それは最高の瞬間を分かち合える職場環境があつてこそではないか。楽しい仕事は楽しい職場から、楽しい職場は「日常の承認」により作られている。日頃から上司に大切にされて、職場の皆からも大切にされ、見てもらえている、そういう思いを持つことができていれば、たとえ注意されても、意見がぶつかっても、簡単に仕事がつまらなくなることはない。むしろそれさえも楽しむための糧となる。

「日常の承認」をポイントにまとめてみると、まさに私達が日頃行なっている利用者支援の大切なポイントと同じであった。支援とは、力



を添えて助けるという意味である。私達職員も力を借りたいと思うこと、助けて欲しい、支えて欲しいと思うことは、色々な場面である。今まで支援は、利用者の方々に対してだけ行なうものだと思っていたが、それは違っていた。職員も人、職員に支援は必要ではなく、職員はお互いに支援し合うことが大切なのだ。と知った。そしてこれをチームワークと言うのだと思う。

そして、私達は世の中で最も良い職場環境を作れる業界だと分かった。なぜなら福祉業界で働く人は、支援、すなわち他者に対して力を添えて助けるということを、日々考え日々実行している人達ばかりだからである。時代と共に福祉を取り巻く環境は大きく変わり、そして私達働き手の価値観も変化してきている。たとえ目指すべき福祉のあり方や理念が変わらないとしても、現在の私達には目まぐるしい変化への対応力が求められ、自分の存在意義や心を満たしたい時代になっているのは事実である。そのような複雑な時代の課題を解決し、安定した職場で仕事をし、充実した人生を送るために必要なことは、やはり仕事を楽しむことである。楽しいという感情は最強である。仕事も好きなことの一つになって心から楽しいと思えるようになれば、こんな幸せなことはない

し、何よりも最強だと思う。残業や休みをほんの数パーセント変えるだけの「働き方改革」よりも、仕事を楽しむ「働きたい改革」の方がワークライフバランスの実現となり、もっと皆が幸せになれるのではないかと私は思う。

「働きたい改革」がもたらす影響は絶大である。もしも全職員の承認力が上がり、管理者が現場職員を、先輩職員が若手職員を大事にし、職場が日常の承認で溢れると、若手職員は上司や先輩を尊敬し、仕事の楽しさを知る。すると職員全体の満足度が上がり、それに伴い職員の連携力もどんどん高まり、総合的な支援力のレベルが今より間違いなく上がる。そして私達の本来の目的である、利用者の方々の笑顔や幸せも増えるはずである。そして理念を大切に守ることに繋がる。

私が思う「職員が普通に楽しむ」とは、職場が日常の承認で溢れ、成果の出る日も出ない日も毎日笑顔で働けることである。そして私の目標は「働きたい改革の推進」である。「職員が普通に楽しむ」そんな最高の職場を、これからは自分の承認から作ることである。この目標を自分自身も楽しみながら達成を目指していきたい。

発表②

「職員が『普通に楽しむ』とは」

茨城県 (福) 筑紫会

真壁授産学園 吉原 大樹氏

今日は、「普通」を「職員ならば誰でも実現可能」と定義する。また、「楽しい」を「充実感、達成感、満足感」と定義する。言い換えると、必要とされているという自己肯定感、ここに居ていいのだという自己有用感、自分ではできるのだという自己効力感であり、こういうものを感じる時に、やりがいや楽しさを味わえるのではないか。

どんな時に楽しいと感じるか。自分の仕事を通して人の役に立ったと実感できた時、感謝された時、喜んでる姿を見た時、普段やっていない支援がどんな形でも帰って来た時、利用者さんの成長に驚かされた時、困難ケースについて、レットルや先入観を創意工夫で乗り越え、利用者さんに変化があった時、利用者さんと一緒に楽しみを形にしていくな時。

自分の仕事を通して自分が役に立っていると感じることが、やりがいに繋がる。それには自分のできることを増やす必要がある。もっと自分の知識や考え方、やれることが増えていけば、もっと多くの人に幸せを提供できるのではないか。また、それが楽しいに繋がるのではないか。福祉において、福祉だけできれば



良い支援ができるか、良い経営ができるかという点、全然そうではない。例えば、高工賃であれば、あまり馴染みがないマーケティングを勉強する。役職者については、組織内の色々な働きやすい職場環境が大事なので、チームビルディング研修を実施している。いきいきと職員が働けてこそ、利用者さんに対して心のこもったサービスが提供できるのである。

青年期ASDについて説明できるか、てんかんに対しての適切な対処法は分かるか、向精神薬の副作用はある程度分かるか、高次脳機能障害の特性を理解しているか。「知らないのに適した支援ができるはずがない、もっと相手を理解するように努めてみませんか」というのが、今回私からの提案である。

利用者さんもハッピーになるし、ちゃんとした支援をして喜んでもらえたら私達も楽しいのではないか。プロフェッショナルの中に楽しさがあるのではないか。一人よがりの支援というのは誰のためにあるのかと

思う。

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の資格取得に挑戦しよう。資格取得が真の目的ではなく、福祉支援の根拠を理解することで、今までの経験がより質の高いものに再構築されるからである。今までのやり方を、違うやり方に変えていくのも楽しさの一つである。

仕事を楽しむコツは、自分のやっていることに興味を持つこと、当事者意識を持つこと、目的・目標を持つこと、それに向かって創意工夫して達成していくことである。仕事の面白さの本質的なところだと思う。

グループワーク

分科会の後半は、グループワークを行ないました。発表を受けて活発な意見交換が行われました。



総括（助言者）

関東社会就労センター協議会

副会長 鈴木 暢 氏

仕事の楽しさは、とても重要である。裏付けるところでは、2007年に内閣府が「国民の生活に関する調査」において、年齢別の理想的な仕事を「楽しさ」「収入」「能力を活かせる」の三つに分けて調査している。20〜24歳では、やはり「楽しさ」が一番である。25〜29歳では、自分で家庭を持つということなのか、少し「収入」の方が上向いている。30〜39歳では、「収入」が一番であり、「楽しさ」との差が開く。それを過ぎると「収入」と「楽しさ」が近づいていく。これは「楽しさ」が仕事を続けていく上で重要なことだと表している数字なのである。当然生活は大事だが、「楽しさ」は欠かせないのである。ちなみに「能力を活かせる」は、ずっと最下位のところである。

神奈川県共同受注窓口において、スペース24のチケットパークインの駐車場清掃を福祉の事業所であるという話があった。「やったことないから」と断る事業所があったり、前向きな返事をする事業所があったりする。勇気を出してやることで一点突破になるし、新たな喜びが発生するのではないか。「やったことないから」で終わらせてしまうと、自分



の中で消化しないで終わってしまおう。『勇気を持って』というところを広げて欲しい。

仕事の楽しみとは、どういうことか。まず自分の仕事の意義をきちんと持つこと。もっと重要なのが、その意義を行なうこと。そしてそれがもたらす価値。そこがぶれずに持てたら、きっと仕事が楽しいものになる。

行政説明

「障害者就労支援施策の動向」

〜これまでとこれから〜

就労系障害福祉サービスについて

講師

厚生労働省社会・援護局

障害保健福祉部 障害福祉課

課長補佐 石井 悠久 氏

○ 障害者を取り巻く状況等

人口推計について、今後の日本の人口は確実に減っていく。人口減少

に伴って、労働力人口が確実に減ってしまう。この層が極端に減ることが重大である。どうやって地域活動・経済活動を維持していくのかは極めて重要な課題である。

障害者の方も、働ける能力・意欲のある方は地域に出て働き、頑張っている。一昔前から障害者の就労支援は大切なものではあったが、現在はその必要性が増している。

○ 障害者福祉の現状

障害者施策の重要性・必要性が高まることで、それにかかる経費・予算も年々伸びている。国の予算・自治体の予算を合わせると3兆円規模となる。介護・医療に比べて急激な伸び率のため「それだけの効果が得られているのか」という財政当局からの指摘が入りやすくなる。就労系サービスでは、利用者一人当たりに対し、毎月12〜17万円の費用を掛けている。その金額に見合う成果は、

と考える方も世の中には多い。そういう方への説明も我々の仕事である。これは、国民の税金が使われているというのが理由である。

利用者の増加に比較して人材の増加は不足している。介護に負けないような障害福祉の人材確保も必要と考えている。

○ 就労系障害福祉サービスの現状

就労移行支援について、前年度に



移行者数がゼロであった事業所が全体の3割ある。地域に受け入れ事業所がないことや、成果としてカウントされないA型への移行等の事情もあるかもしれないので、詳細を分析していきたいと感じている。

就労系障害福祉サービスの在宅利用について、利用はしたいが通所が難しいという声も多いため、多様な働き方として在宅利用の加算も創設している。実際には自治体が在宅利用の支給をできないと考えているところもまだ多いため、労務管理等をきちんと行えば、通所が難しい利用者さんのサービス利用が全国で増えてきているということを伝えていきたいと思っています。

就労継続支援A型について、全国の7割の事業所が経営改善計画を提

出せざるを得ない状態である。経営改善に関わる支援も必要と感じている。平均工賃は全体に見て右肩上がりのため、これを維持してほしい。

就労定着支援について、就労移行支援事業所3200のうち行っているのが770の事業所と考えると、国としてはまだ少ないと感じる。なぜそのような現状なのかを詳しく知る必要がある、今後重要なサービスとして取り組む必要がある喫緊の課題である。問題となるのは自治体の理解・協力であり、国と自治体の対話や理解を深める努力をしなくては

と、思っている。就労継続支援B型について、全体的に見て利用者数・事業所数は増えている。年齢別分布を考えた時に、65歳以上の数字が年々増えている。高齢化に伴う機能低下がある方の就労へのニーズを受けている形と感じる。また、一般就労から福祉社というニーズの受け入れにもなっている。工賃の分布は二極化が進んでいる。報酬改定に伴い、算出方法等へ様々な質問・疑問が出ている。国としても少しでも良くなるようにと思っている、忌憚なき意見を頂きたいと思っている。

○ 工賃等向上に向けた

全国的支援体制構築モデル事業 都道府県域を超え、工賃倍増等へ取り組み実績のある法人が、全国の

事例を収集し整理すると共に、都道府県と連携しながら経営改善支援を行う。低工賃事業所と高工賃事業所への支援を一つにせず、それぞれに合った取り組みが必要である。

昨年度は低工賃事業所への働き掛けを行った。今年度は中工賃・高工賃の事業所へのアプローチを行う。上記に関して一定のノウハウがまとまれば、各自治体に提案していく。各自治体も異なるアプローチを理解し、国の予算事業を活用してほしい。

○ 農福連携

農福連携推進会議について、霞が関の中で一部強い盛り上がりが見られた。小池会長にも参加して頂いた。担い手として障害者の力も必要であるし、土に触れることで気持ちが高ち着いたという声もある。せつかくの盛り上がりであるので「農福連携ビジョン」を決定し、進められる部分においては進めていきたい。農業だけではなく水産業・林業等でも広がられないか、また、障害者だけではなく高齢者・生活困窮者・引きこもりの方に対しても社会参加の支援としてノウハウが活用できるのではないかと考え、厚生労働省としても支援していきたい。

○ 最後に

国の障害者雇用の不適切計上に係り、先の国会において障害者雇用促進法の改正法が成立した。一

義的には障害者雇用であるが、その中で福祉との密接な連携等の指摘もあった。通勤の問題、就労中の生活介護について等、福祉の就労担当についても、福祉と労働がより一体的になるように早急な対応をと指示があった。

交流会

交流会の司会は、よしもとクリエティブ・エンジニアリング所属のお笑いコンビ「アンカンミンカン」にお願いしました。お2人とも群馬県みどり市出身です。「あなたの街に



住みますプロジェクト」の企画により、住みます芸人として、平成23年に東京から地元である群馬県に拠点を移し活動されています。会場を巻き込んだ司会進行で、たくさん笑い生まれ、大変盛り上がりました。抽選会では、群馬県の各事業所から選りすぐりの景品を用意しました。次回開催県である茨城県のしずかの創造苑様からも、全国ナイスハートバザール等の販売会やネットでも大人気の「揚げ餅」を提供して頂きました。

親しい仲間、大会で新しくできた仲間と語りながら、楽しい時間はあつという間に過ぎていきました。

2日目

記念講演

「普通に楽しむ実践例を通して 見えてきたもの」

講師

東洋大学 ライフデザイン学部

人間環境デザイン学科

教授 繁成 剛氏

○ 障害のある人の楽しみとは

もちろんアクティブに、車いすを使って全国を旅行するような方もいらっしゃると思うが、知的や重度の



障害がある方にとっては、日常そのものに楽しさが含まれているのではないかと思う。家族や友人との会話、テレビ、入浴や食事、犬の散歩等、我々が日常で気にやっているようなことを楽しみにしている方もいると思う。

知的・発達障害のある方は、心地よい雰囲気・安心できる居場所・いつもと変わらない環境が精神的な安定に繋がり、自分の気に入った人やものに囲まれていると、安心して楽しい時間を過ごせるのではないか。また、障害のある方には個々に合った仕事の内容やペースがあるが、それに合った仕事をするのが楽しみとなる。施設の行事やプログラムを楽しみにしていることもある。

#### ○おもちゃ図書館

おもちゃ図書館は、スウェーデンで自閉症児の母親達がおもちゃを交換し合ったことから始まった。障害のある子供に、特性や発達段階に合ったおもちゃを貸し出す活動である。

日本では、1975年に辻井正氏が、ヨーロッパで普及していたおもちゃ図書館を大阪で開設したのが最初である。現在日本には500箇所あり、社会福祉協議会やボランティア団体が運営の中心となっている。

おもちゃ図書館は、子育て支援の場であり、普段は購入できないような高価で質の高いおもちゃを無料で借りることができる。普通のおもちゃ屋さんではないような、その子に合ったおもちゃが数多く揃っている。障害特性に合うおもちゃをスタッフに相談することもできる。親同士の交流の場でもあり、そこで遊ばせることも可能である。

子供にとっておもちゃは、発達のために欠かせないものである。製品となつてのおもちゃだけでなく、日用品・自分の指や手足、体等、色々なものがおもちゃであり、日常生活を送りながら遊んでいる。遊びが仕事であるように、そこから色々な能力を引き出し、発達している。特にコミュニケーション能力を引き出すため、媒介となるのがおもちゃである。

#### ○高齢者を対象とした玩具療法

この流れは、オーストラリアが発祥のダイバージオナルセラピーから来ている。これは、一人の人間がより楽しく意味のある生活を送るために、必要なもの・ことを計画的に探し、意図的に生み出していくための

あらゆる手段・手法・哲学のことである。ダイバージオンの意味は「息抜き」とか「気晴らし」である。

今注目されているのは、ドールセラピーであり、赤ちゃんの人形を用いることが多い。これにより認知症高齢者の表情が全く変わる。「無表情・無口であった祖母が急に言葉・表情豊かになった」という学生の体験もある。女性だけでなく男性にも有効で、日本玩具福祉学会による支援活動も行われている。ロボットセラピーも進められており、産業技術総合研究所のアザラシ型ロボット『パロ』や、東郷製作所のいやし型赤ちゃんロボット『スマイビ』等が実用化されている。

#### ○芸術を楽しむ

アートは心を開放し、想像の世界に引き込む力がある。自分で意思を伝えることが苦手な方が、一気に自分の持つ持っている才能を開花させることも良く見られる。画材を持たせると自由奔放に表現する。表現なのか表出なのかという議論もあるが、芸術を学んで作られたものとは違う。誰が見ても引き込まれる色彩感覚・インパクト・ユニークな造形の作品が作られることもある。

障害者芸術を支援する活動として、エイブル・アート・ジャパン、たんぼの家、アールブリュット等がある。

#### ○スポーツを楽しむ

かつて障害のある方にスポーツを取り入れることは難しいものであったが、イギリスのストーク・マンデビル病院のグッドマン医師は、障害者スポーツに力を入れ、世界初の大会を開催した。そこで研修を受けた中村裕医師が国立別府病院で普及活動を展開し、1964年には東京で初めてパラリンピックが開催された。

現在では、知的障害のある方のための競技会を開催するスペシャルオリンピックスや、競技活動等を支援する全日本知的障がい者スポーツ協会等、広がりが見られている。

#### ○楽しむことの意味

まず、親しい人や身近な人と場所を共有することが重要である。自然の中で新鮮な空気・様々な植物・生物の姿を見たり触れたりすること、家族や仲間との食事、スポーツ・創作活動を楽しむことも良い。障害のある方へのケアは大変なこともあるが、家族や施設スタッフが、日常生活の中のケアを楽しむ工夫をすることも必要。福祉用具を上手く活用したり、部屋の色や家具のデザイン、音楽、香り等、環境をデザインすることで、少しでも働くこと・ケアすることが楽しめる。仕事も人生も楽しんで頂きたい。

# シンポジウム

テーマ「普通に楽しむ」

発表①

新潟県 赤倉観光ホテル

板橋 勇樹氏

昭和57生まれの36歳。幼い頃から夜遅い母に代わって姉が育ててくれた。母の他界も乗り越えて、建設会社やとび職等色々な仕事をしてきた。現在は、赤倉観光リゾート&スパでホールの食器洗いやゴルフ場カート洗浄等を行っている。

普段から心掛けていることは、一度に色々なことをするのが苦手で作業スピードも遅くなりがちだが、苦手意識を持たず前向きに頑張ること。なるべく人見知りをしたくないこと。



ももとは人見知りであるが、困りごとがあれば上司や支援者に相談したり、職場では、他国の派遣の方と関わりながら日本語を教えたりしている。色々な人と関わることで自身の刺激になり発見がある。

テーマの「普通に楽しむ」について、自分は生活もあるので仕事は仕事と割り切り、楽しみを見つけている。今一番楽しみにしているのは、働いたお金でAKB48のコンサートを見に行ったり、総選挙に行ったり、関東方面のライブに行くこと。遠方に行く場合は連泊するので、会社で有休を取り、前もって上司に相談して理解を得られるようにしている。日程や交通費、宿泊先等の計画を事前に立て、現地ではスマホのマップやスイカを活用する等、色々なツールを活用して、ライブ以外にもおいしいものを食べたり、観光をする等、楽しむことができる。指原さんの卒業コンサートでも、横浜中華街で小籠包や中華まんを食べた。10年ぶり

の横浜で、街が変わったと感じた。今はスムーズに計画を立てて楽しむことができているが、そうなるまでにいろいろな失敗をしている。新潟のNGT48の総選挙では、時間が間に合わず宿泊できずに車で野宿をした経験もある。知らない人が来るので怖かったし、早く時間が経たないかなと思った。そういうことがあって、今年はきちんと計画を立てて行けたので、今度は大阪で楽しむのかなと思っている。

発表②

群馬県 (福)恵の園

ベテル 高橋 剛氏

平成13年に養護学校を卒業し、その4月から恵の園ベテルに通っている。ベテルは就労系の事業所で、軽作業班・製袋班・販売班・印刷班の4グループがある。私は印刷班で、パソコンを使って一般企業・福祉施設の名刺や封筒の印刷をしている。

平成22年から約2年、渋川年金事務所一般就労経験があり、恵の園の職員にバス停まで送迎してもらい、バスで通勤していた。主にパソコンを使ってデータ入力を行い、とても良い経験になった。初めて働いて苦労して稼いだ給料はとても嬉しかった。一般就労に協力してくれた多くの方々に感謝している。2年の契約が終わり、その後はベテルのB型で頑張っている。



一般就労の間、知り合いに教えてもらい、スナックで初めてお酒を飲んだ。初めてで緊張したが、ママさんは障害者に理解がある方で、楽しくお酒を飲んでカラオケを歌うことができた。ホステスさんに作ってもらったウイスキーの水割りを飲み、中森明菜のデザインや、ママと一緒に荻野目洋子のダンシングヒーローを歌った。その頃は週2回くらい通っていたが、今は健康を考えてお酒を控えている。

今は渋川市内のグループホームに入居し、ベテルに通って仕事を頑張っている。ホームでの生活はとても充実している。休みの日は、週に1度最寄りのスーパーに職員の送迎で行き、ペットボトルの麦茶等を買っている。普段私は歩行器で生活しているが、外出時は安全を考えて車椅子で出かけている。このスーパーは通路も広いので買い物しやすい。以前よりは増えてきたが、障害

があると行ける飲食店やスーパーが限られてしまう。障害のある人でも気軽に出かけられるようなお店がもっと増えると良いなと思っっている。その他、趣味で詩を思いついた時に書いています。

「笑顔」

君の笑顔はとても素敵で

僕は君の笑顔を見ると

とても幸せな気持ちになる

最後に、ベテルの職員さん・利用者さんはとても明るく、活気あふれる事業所です。

発表③

群馬県 ワークプラザ虹

ピアサポーター 池田 頼彦 氏

精神疾患を持つピアサポーターで、病気になって20年ほど経ち、辛く落ち込んだ時期も多くあったが、今は社会で働いて、自分の生活を楽しく過ごしている。回復・リカバリーが進む道のりは、自分の確かな足がかりであった。

今は事業所に通所し、悩み、笑いながら毎日を楽しんでいる。地域生活は3年くらい経ったが、働くことを楽しみ、工賃で自分の趣味を楽しんでいる。趣味はインドアであるが、どこかに外出するだけでも興味がある。2か月に1度シヨッピングモールに行ってCDや漫画を買っている。リラククスできてくつろげる。



漫画を読み終えた後は必ずコーヒーを飲んで喫煙をする。心地良い過ごし方になっている。

私にはお別れした恋人がいる。今

までの人生で、この交際を超える楽しい気持ちがないので、語らせても

raitai。話をするだけで一喜一憂

して2人で過ごしてきたが、その一

つ一つが私に嬉しい気持ちを感じさ

せてくれた。人との接し方や付き合

い方が不器用なので、口論になるこ

ともすごく多かった。そして決まっ

て謝るのは自分の方だった。今思え

ば本当に不思議な気持ちがある。私

は、あまり女性と交際したことがな

い。コミュニケーションが必要だ

と、とても強く感じた。毎日の電話

やメールのやりとり、当たり前のこ

ともかもしれないが、全く経験のない

コミュニケーションに、私は合わせ

ることができなかった。もともと

と思いやりを伝えれば良かったかも

しれないが、正直な自分には飾る言

葉はとても言いにくかった。今でも暖かい会話を良く思い出す。

趣味の楽しみとして、私は県営住

宅に1人で暮らしているが、1人で

ずっと部屋にいると気が滅入ってし

まう。音楽を聴くのはもともと好き

で、浴びるほど好きな音楽を聴く

と、それだけで楽しくなる。普段は

日中活動として事業所で働いている

が、趣味の充実に余念がない。一生

懸命に働き、楽しむ。今を生きたい

ることが楽しい。時々ぐったりして

缶コーヒーを飲んでいるが、気持ち

にあるのは「今日も頑張った、そし

て明日も仕事を頑張ろう」というポ

ジティブな感じである。

ワークプラザ虹で、楽しく明るく

元気良く、いつも笑顔で皆と話をす

る。それが楽しい。その気持ちを確

かに感じて、リカバリーが進み、今

こうして皆さんに伝えていく。重

いときは本当に重かった。でも今は、

社会で皆さんの前に立って明るく伝

えている。私はいつも、辛くても耐

えてしまう。それが私の信念だから。

悩んで笑ってくじけて、そんなあり

ふれた幸せを楽しんでいる。人間だ

から泣きたくなる時も嬉しくて楽し

いと思う時もある。でもそれがそれ

ぞれの楽しみなのだと思う。障害を

持つていてもいなくても、自分の気

持ちは誰にでもある。だって私たち

は障害のある普通の人間だから。私

たちは健常者ではないが、しっかりと根っこは持っている。育つ花の色が違う、個性のあるお花だと思っ。それぞれのカラーがある。皆さんの支援が私達障害を持つ人を支えてくれている。心から感謝したい。

まとめ(コーディネーター)

関東社会就労センター協議会

副会長 内藤 晃 氏



3人の方のお話を聞く時に「日常」「非日常」の話をした。繁成先生のお話の中でも、障害のある方が楽しむ時に制限されてしまう部分があり、日常に閉じこもりがちだから「非日常的な体験を」と一般的に職員が考えるかもしれないが、日常の中こそ安心の拠り所があるという方もいるのであり、単に非日常をお届けすることが当たる方とそうでない方がいるということがあった。旅行に連れていくことが楽しみの提供であるという一面的な捉え方をしている。繁成先生のお話を聞く中で私は感じた。一般的な目で見れば、障害

のある方は日常に変化が乏しいと思いがちであるが、その中に楽しみを見つけているというご本人の感性は研ぎ澄まされているように感じる。そういう意味で「日常」「非日常」と表現したが、改めてその辺をしつかりと捉えて頂ければと思っている。

最近読んだ「徹底的に考えてリノベをしたら、皆に伝えられなくなった50のこと」という本の中で、なるほどと思ったことがあるので紹介したい。我々の取引には2種類あって、1つは「等価交換型」である。130円お店を持って行くと1300円の物が買えるということである。しかし、全てがそうではなく、もう一つが「共同プロジェクト型」である。例えば、体調が悪くて医者に行き、治療費が2万円掛かったとする。お医者さんに2万円を払い、お医者さんは健康を渡すということにはならない。お医者さんはアイデアを出してくれたけれど、自分も健康のためになにかしなくてはならないということになる。「共同プロジェクト型」は、共通の目的に向かって協力する必要がある。同じお金を払っていても成果が変わってくるのである。

皆さんが事業所で提供しているサービスや楽しむための支援も「共同プロジェクト型」である。相手の状況、プライバシーも含めて相手のことが良く分からないと成立しな

い。今日学んだことを持ち帰って何をすればよいかと言ったら、まず目の前の利用者さんと向き合って、どのように情報を掴んでいくかということに繋げて頂けたら良い。

## 閉会式

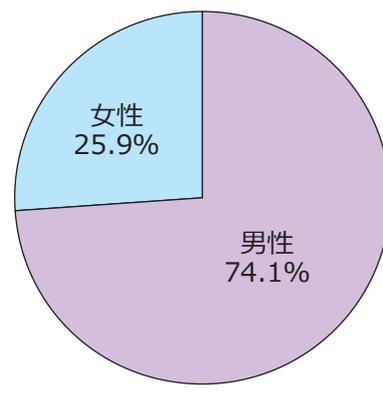
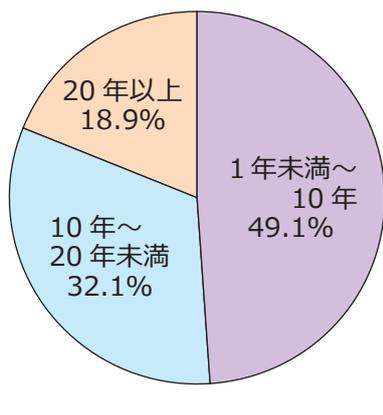
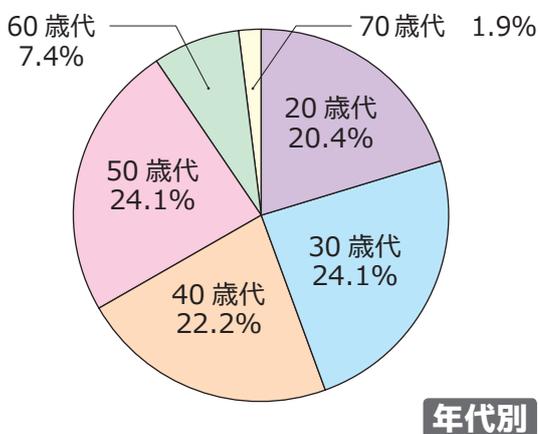
閉会式では、次回開催県の茨城県を代表し、茨城県社会就労センター協議会会長代理として和田道代様よりご挨拶を頂きました。「茨城県は魅力度ランキングでは低いものの、観光地として有名な場所があり、海も山もフルーツもあり、

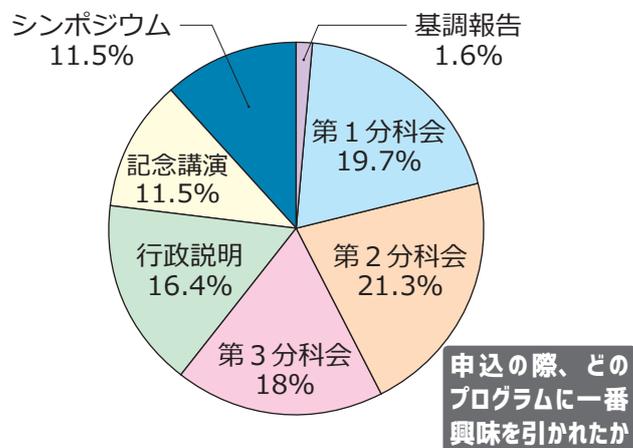
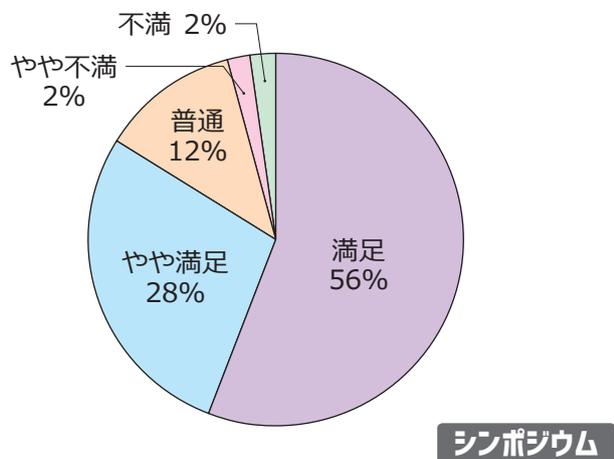
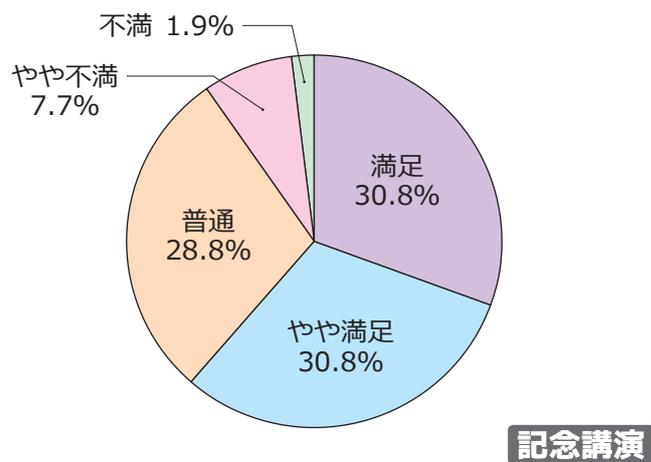
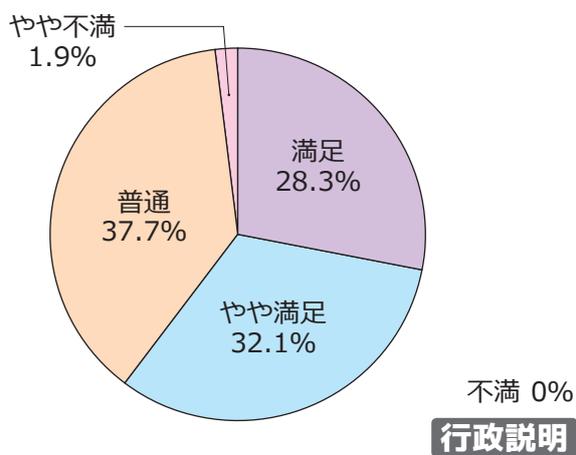
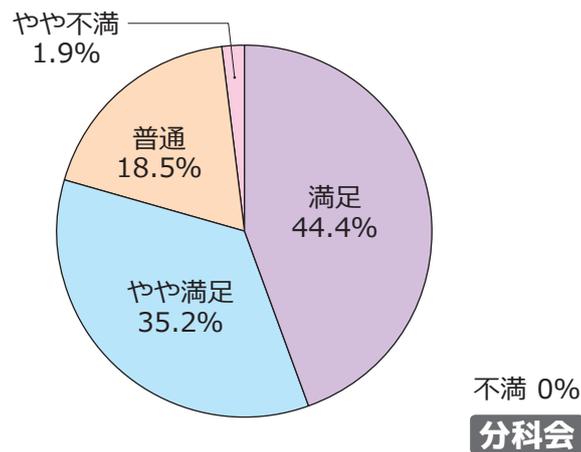
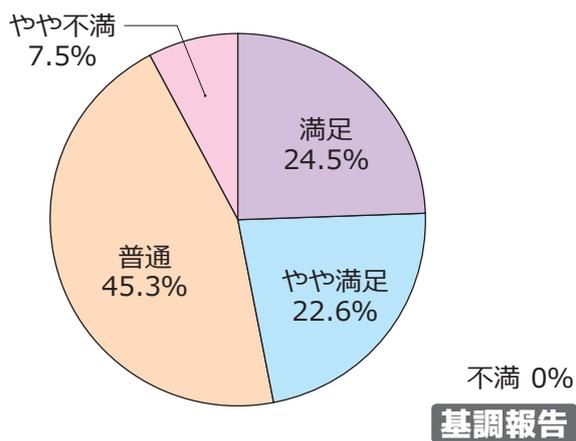


盛りだくさんで、色々なものがあるので、少しでも魅力を感じて頂けたらと思っています」とお話を頂きました。また、群馬県社会就労センターの中塚美子会長より、今大会へのご協力に対しての御礼と、来年度の大会へも協力していきたいというお話を頂きました。

今大会の開催にご協力、ご参加頂きました皆様にご心より御礼申し上げます。来年度の研究大会につきましても皆様のご参加をお待ちしております。

## 大会アンケート 集計結果





研究大会全体について、意見・感想

- ・分科会では発表のみであったため、折角希望の内容の人たちが集まっているので、もう少し情報を共有できる時間がほしかった。
- ・本来のあるべき障害福祉の形を考える、いい機会になった。
- ・今回、研究大会にスタッフとして参加し、それぞれのプログラムに参加したが、とても勉強になった。今後の事業所での仕事に役立てていきたい。基調講演を聴くことができず残念だった。
- ・楽しみに重点をおいており、職員・利用者さん共に楽しんで生活をしていくことが良いと分かって良かった。
- ・利用者が楽しむ行事が最近少し減ってしまったので、また復活できるように努力し、そのことで仕事励みになればいいと思った。
- ・シンポジウムの内容は、シンポジウムでやらず発表でとどめた方が、より光ったのではないかな。
- ・良いテーマで良い発表だった。シンポジウムのリアルな話が良かった。第1分科会の小池会長のまとめも良かった。今はなじみが無いと感じる人も多いのかもしれないが、楽しみは人が生きる上で欠かせないこと、これからセルブにとっても重要なテーマになるだろう。まずは第一歩。

## 研究大会全体について、意見・感想

- 社会就労センター協議会が「普通に楽しむ」というテーマで研究大会を開催されたことに大変興味を持った。働くことがお金のためだけの「苦役」にならないためにも、そのモチベーションとなる余暇活動の充実は真剣に考えなければならないテーマだと思う。
- 第3分科会のフィロスあけぼのの方の講義が勤務3年目の私にとって、とても心に響く話となった。職場に「日常の承認」を持ち帰り実践していきたいと思う。
- 他施設の取り組みを知れて、とても参考になった。実際にその施設へ見学に行ってみたいと思う。
- 第1分科会で、「楽しむ」＝「行事・趣味・課外活動」という概念の固定化を感じた。「家でスマホをいじってる」様な過ごし方が「普通」でこういった面にもアプローチがほしいと感じた。
- 皆で集まり意見交換することは非常に刺激に也大切なことだと思った。
- 普通にたのしむという非常に難しいテーマや選択のように感じたが、仕事・余暇・日常生活において楽しむことの大切さを実感できる研修会だった。
- 改めて、福祉現場に身を置くものとして、自己のスキルアップや生涯学習が必要だと感じました。第1分科会やシンポジウムでの利用者の写真や飾らない言葉は、響くものがあり、仕事の姿勢を反省した場面もあった。
- 第2分科会に参加した。若い職員が、とても楽しく意欲的な発表をされていてとても良かった。どのようにしたら、どのようにモチベーションを高められるのか、良い刺激と学びになった。
- 良い場所で開催されている。しかし、参加費・宿泊代・交流会費が高くなり参加しにくくなる。
- 工賃向上がメインだったセルブの研修で、今回のテーマは難しくもあり、レジュメを見ると共感できる面も多くあり大変良かった。
- 一人ひとりが楽しむために、一人ひとりができることを継続して行うことが大切だと思った。利用者さんを楽しませるのではなく、職員が楽しんで仕事をするのが大事だと気付かされた。
- 各施設での取り組みなどを知ることが出来、日々の支援に活かさせていけたらと思う。
- 当事者の発表・意見を聞くことができたシンポジウムは、今後の利用者支援について大変参考になり、とても良かった。
- 「普通」という言葉の重さや重要さを実感し、とても勉強になった。
- プログラム・内容共に大変良かった。
- 私たちが支援している利用者さんの生の声が聞けたことが一番良かった。
- 移動の時間が少々短いと感じた。
- 6月の月末は色々大変なため、時期をずらして頂きたい。
- 「工賃向上と働く喜び」に関して、様々な事業所の対策や利用者さんのアプローチを知ることができ、良い勉強になった。
- テーマとしては良かったが、話を聞く限り、自己満足過ぎた内容だった。そして、理想と現実が見えていないものであった。
- 分科会はとても良かったと思うが、知った内容が多かったのもっと実践的なことや新しい情報が欲しかった。
- 難しいテーマを上手にまとめて話して下さりありがとうございました。
- 各施設の事例について、平均工賃・売上が記載されていたが、もう少し具体的なアクションプラン、どのような経緯・背景があり売上増に繋がっていたのか「キッカケ」となったポイントに重点をおいた資料だともっと勉強になると思った。
- 「普通に楽しむ」というテーマだったが期待を裏切らない内容だった。
- また参加できることを楽しみにしている。

## 会場・運営面で気付いたこと

- 交通の便利な所、分かりやすく会場までの案内図等々、迷うこと無くたどり着けて大変助かった。
- 会場内の冷房がとても効いていて、寒いぐらいだった。
- 結構会場がいっぱい座る場所に苦労したことがあった。
- 2日目の会場 丹頂Ⅰ・Ⅱの冷房が効きすぎて寒かった。
- 2階にも看板があると良かった。
- シャベリ方に強弱があると眠くならないのでつけてほしい。

## 会場・運営面で気付いたこと

- ・2日間のために貴重な時間をさいて準備いただいてありがとうございました。
- ・申込みのFAX返信が無かったり、参加券の発送が遅く、分科会チケットが入っていなかったり、旅行会社の不手際が目立った。
- ・会場は駅近くで大変良かったが、駐車場の確保にかなり苦労した。大会の運営はとてもスムーズで良かったと思う。スタッフの皆様には感謝している。
- ・会場への案内係の方がいて、駅から会場までスムーズに足を運ぶことができた。
- ・2日目の追加資料があったのか、分からなかった。
- ・スタッフの方が良く動いていた。何のトラブルも感じないで研修に参加でき良かった。
- ・空調が寒い場面があった。
- ・調整が大変だったかと思うが、参加券・分科会・振込などの書類がもう少し早いと助かる。
- ・物販・交流会・会の運営等の準備大変だったと思うが、楽しく過ごすことができた。
- ・立地が良く、アクセスが簡単で良かった。
- ・参加券等の発送が遅い。
- ・スムーズな運営で、細やかな配慮がなされており、とても良かった。
- ・展示等もあり、販売するにあたっての参考になった。
- ・全てとても良かった。
- ・全てスムーズで助かった。
- ・1日目は会場の冷房が気持ちよかったが、2日目は少々冷えすぎていた気がした。
- ・カメラで撮影している回数が多いかもと感じた。フラッシュが気になった。
- ・移動時間・トイレ休憩を考えるともう少し休憩時間が欲しい。
- ・運営・進行はとてもスムーズに行われていて、連携がとれていると思った。アットホームな雰囲気もとてもすてきだった。
- ・参加券発送が遅れる・発送しない場合には一報が欲しかった。
- ・群馬の関係者の皆様には感謝いたします。
- ・展示物が大変参考に良かった。

## 次回開催県より

「令和2年度研究大会 in 水戸」

茨城県社会就労センター協議会

令和2年度の関東就労センターの研究大会は、平成24年6月のつくば市で行って以来の茨城県での開催になります。

平成24年は障害者総合支援法の制定の年でもありました。早6年が経過し総合支援法の下、訓練等給付では就労継続A型での大量解雇や倒産といった社会問題があり、工賃向上計画では工賃の支給額により報酬が変動するといった改定がなされました。令和に入り利用者の高齢化重度化、報酬問題、人手不足等の諸問題を抱えながら事業所の運営を維持していかなければなりません。

とりわけ、20年30年と続いている事業所では利用者の高齢化が問題となつていきます。就労継続から生活介護へ移行出来る方たちは良いのですが、制度の中で取り残されてしまったり高齢でも働きたい等の人達の支援をどうするのか、茨城県での研究大会では仮称「いつまでも、元気に暮らし、働ける社会を作ろう」をテーマの一つにし、六十五歳になっても就労継続事業所で働く人達にスポットを当て、各事業所

の取組みや相談支援との連携等の重要性を考えていきたいと思います。

## 編集後記

台風15号、19号での被害にあわれた地域の皆様には謹んでお見舞いも申し上げます。一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。群馬県開催の研究大会に多くの方が参加いただき感謝申し上げます。

今回は「普通に楽しむ」のテーマでしたが発表者もレポートのみの提出の施設におかれてもアンケートに期待に背かかったと記載されていてほっとしています。

実行委員会発足以来テーマをいろいろ考えて「工賃向上」については関東の研修でも毎回実施してしまして何のために仕事に取り組むのか、利用者と職員双方が原点に戻り楽しんで日々過ごしているか、これらのことを今回の研究テーマとしました。

ニュース内容はスタッフの記録係が丁寧に開会式から基調報告、各分科会、シンポジウム等詳細に報告していただきました。参加できなかった方もその当時の雰囲気が少しでも感じていただけたらと思います。

日本ラクビーは今初めてベスト8に入り「one team」合言葉で日本中を沸かし、今回の私たちと同じだと感じました。